

ちゃんと知ろう、人獣共通感染症

以前は人畜共通感染症または人畜共通伝染病という呼称が一般的であったが、「畜」という語が家畜のみを想起するのに対して、近年は愛玩動物(ペット)や野生動物からの感染が重大な問題になっているので人獣共通感染症という言葉を用いようとする動きがあります。

以前は、愛玩用に動物を家で飼うという形態が多かったのですが、愛玩動物という意味合いよりも、よりヒトに近い存在として伴侶動物として飼われるように、いや、暮らしを共にするようになりました。**大切なことは、ヒトと動物の共通の感染症について正しく理解し、その予防を図ることです。**

また、獣医学の立場からは、「動物は汚いもの」という意識を必要以上に広く植え付けるだけでなく、ヒトから動物への感染(ヒト由来感染症)による動物への被害という問題もあって言われています。特にヒト由来の抗生物質耐性菌による動物への被害を問題視する報告もあります。

1. 狂犬病

狂犬病は発病すると致死率 100%という極めて恐ろしい病気です。日本では狂犬病予防法により 91 日齢以上のイヌは狂犬病ワクチンを打つこと、また登録も義務付けられています。そのおかげで、1957 年以降発生は有りませんでした。海外で狂犬病の動物に咬まれて、国内で発症し死亡した事例が 1970 年に 1 件、2006 年に 2 例ありました。外国では未開発国のみならず、米国やヨーロッパ諸国も含めてまだ絶滅していません。

治療は、狂犬病ウイルスは比較的弱いウイルスで、消毒薬や石鹼で死滅します。イヌや動物に噛まれたら、先ず、流水で石鹼をつけて十分洗い、消毒します。

神経症状がでたら、治療法はありません。

2. レプトスピラ症

らせん型の細菌によって引き起こされる病気で、野生のネズミによって媒介されます。ネズミは菌を保有していても無症状で尿中に病原菌を排泄し環境を汚染します。

犬では細菌に汚染されたものに触れたり舐めたりする事により感染し、感染すると肝炎、腎炎や出血性敗血症を起こす場合と、無症状で尿中に菌を排泄するキャリアになる場合があります。

この菌は、ヒトや動物の健康な皮膚にふれただけで感染する(皮膚感染)という大きな特徴があります。

菌は熱、乾燥、各種消毒薬には弱く、通常の消毒方法で、簡単に死滅します。

3. 包虫症(エキノコックス症)

犬やキツネに寄生する条虫で大きさが 5~6mm と非常に小さく、犬に対する病原性はほとんど有りません。しかし、ひとたび、人間に寄生すると悪性腫瘍と同じように根治するのが難しく致命的になる事も有ります。人への感染経路は経口感染で虫卵を汚染された水や食べ物あるいは、感染動物との接触で感染することが有ります。犬の駆虫は比較的簡単なので発生地域では定期的に駆虫薬を飲ませておくのが良いでしょう。また、キタキツネが生息する地域に犬を連れていく場合は駆虫薬を投薬しておいた方が良いでしょう。

エキノコックス症は、いまや北海道全体に拡大しています。

2004 年の感染症法改正で、イヌのエキノコックス症は獣医師の届出対象になっています。

4. 回虫症

犬や猫の回虫が人の体に入ると幼虫のまま体内を移動します。これを幼虫移行症と言います。

人への感染は経口感染で、主に幼児が感染しやすく危険です。回虫の卵の殻は非常に強力です。体外では非常に長く生存します。回虫卵で汚染された砂場で遊んだり感染犬を触って良く手を洗わないで物を食べたり指をしゃぶったりして感染します。人での症状は眼内型と内蔵型に分かれますが、特に眼科の分野では症状が重く問題となります。予防法としては特に幼犬で虫卵の排泄が多く見られるので、飼育初期に確実に駆虫することが大切です。また動物を触ったらよく手を洗う習慣をつけたり、動物に口を舐めさせたりしない事も必要です。

他に感染経路として、ある動物の回虫に感染した家畜の肝臓や肉の刺身などの生食により感染することがあります。

5. 細菌性胃腸炎

犬や猫はサルモネラ、キャンピロバクター等、食中毒の原因菌を健康でも保菌している場合があります。これらの菌は人に経口感染すると下痢や吐き気の原因となる事があります。実際には人への感染は汚染された食べ物や水の摂食によるものが

多いのですが動物に口を舐められたりして直接感染する場合があります。特に動物が下痢をすると細菌の排泄が多くなるので早期の治療と同時に便で汚染された環境の消毒が重要となります

6. トキソプラズマ

猫のコクシジウム的一种で人に感染すると流産や眼疾患の原因となる事が有ります。猫では初感染時にオーシストと言う虫卵を排泄しますがこの卵の抵抗力は非常に強く長く環境を汚染します。人への感染は経口感染が最も多く、感染した豚や羊(豚や羊は無症状)の肉を生焼けの状態で食べて感染します。予防法はなるべく猫は室内で飼育感染を予防することと、下痢をした場合は早めの治療と便で汚染された箇所の熱湯による消毒が有効です。

また、豚や羊を調理するときは良く過熱し使用したまな板や包丁は熱湯で消毒しておくが良いでしょう。

7. パスツレラ

細菌の一種ですが90%以上のネコやイヌが口の中に保菌しています。人がネコに咬まれると非常に高い確率で化膿が起きるのでできるだけ早く病院で治療を受けた方が良いと思われます。

8. オウム病

クラミジアと言う病原体によって起こる病気です。人が感染した場合適切な治療がされないと肺炎や心筋炎で死亡する場合があります。人での症状は風邪に似ているので病院にかかる時は鳥を飼育している事を医師に告げておくが良いと思われます。クラミジアにはいくつかの種類がありその中には人の眼疾患や性病の原因となるクラミジア・トラコーマティス、鳥のオウム病の原因となるクラミジア・シッタシなどがあります。オウム病はオウムだけでなくハトや文鳥等の鳥類全般に見られるので飛べない野鳥を保護した場合も注意が必要です。感染鳥の症状は下痢が最も多く便に多量の病原体を排泄します。また、健康にみえても保菌者となって病原体を排泄する事があるので普段から衛生管理に注意して掃除をする事と、手洗いが重要となります。

9. ネコひっかき病

その名の通りネコにひっかかれたり、咬まれたりした後に発症

する病気です。このバルトネラ菌を広めるのはノミで、感染ノミにさされたりしても感染しますし、イヌから感染することもあります。

ヒトの15歳以下が半分を占めます。

予防として手洗い、消毒、ノミの駆除があります。

●ほかに動物由来の感染症はたくさんあります。

動物由来感染症の病原体に感染しても動物は無症状なことがあるため、知らないうちに感染してしまう場合があります。体に不調を感じたら早めに受診をしてください。症状があっても、診察時に医師が人畜共通感染症だと見抜けない場合も多いので自分から「人獣共通感染症かも」と自己申告するのがよさそうだと思います。だから、きちんと知っておいて、自分の身は自分で守りましょう。

◆基本的な予防方法

『過度な接触は避けるように!』

『友達と同じ感覚で接してください』

知らないうちに唾液や粘液にふれたりすることもあるため、

動物にさわった後は基本として必ず手を洗いましょう。

◆感染標語◆

- ・急ぎでも 手洗い守って 感染対策
- ・これぐらい そして広がる 院内感染
- ・手から手へ 感染源は 渡さない
- ・広げよう 知識という名の ワクチンを



参考・・・動物由来感染症ハンドブック2010厚生労働省